

徳島阿南

我々は1996年の4月12日に羽田から飛行機に乗って徳島県徳島空港に着きました。そして電車とタクシーを乗り継いで阿南市へやってきました。これは1991年の正月頃に2人で阿南に来て以来のことでした。私は代々山梨県の家系のため、四国は言葉も文化もまったく知りませんでした。それで、当初は失業保険をもらいながら、カコと2人で、カコの家のあるところをきれいにしたり、修理したりして過ごしました。私は庭の木の枝を切って、子供たちが庭で遊んでも傷つかないようにしました。そして、カコと2人で、部屋の天井から壁、そして床などをベターライフで道具や壁紙、カーペットやペンキなどを買って来ては修理しました。これで、家は見違えるようにきれいになりました。

5月になると、維作が神崎幼稚園へ通えるようになりました。しかし、どういうわけか彼はいつも風ぎみだったり、熱っぽかったり、体調があまりよくありませんでした。今までほとんど病気したことがない子供だったので、これは変だと思いました。あるとき、幼稚園でプール遊びをしたその日から、40度を超えるすごい熱が出るようになり、これはいわゆる「プール熱」(アデノウイルスによる)という病気だと判断し、阿南医師会中央病院へ彼を連れていきました。あまりにひどい熱なので、ガラシンという抗生物質薬の点滴が必要だったのです。しかし、その小児科の医者があまり無器用で、点滴できませんでした。しかし、維作が体に紫斑(しはん)が出て、関節の痛みを訴えるようになりました。さらに熱性痙攣になりかけてきたので、脳に障害を残してはならないと考え、私とカコは医師の承諾の下、点滴セットを自宅へ持ってきて、カコが点適しました。カコはさすがに優秀な看護婦でした。一回で見事に針を血管にいれ、無事に、点滴がすみました。その効果はてきめんで、維作の熱はすぐに下がり、危うくリュウマチ熱になるところを防ぐことができました。後で我々が調べたところ、これは溶連菌感染症によるアレルギー性紫斑病(シェンライン-ヘノッフ紫斑病)とわかりました。この経験から、我々は維作が阿南の空気に慣れるまで、1年通園を遅らせるのが一番と考え、幼稚園をいったん止めることにしました。この判断はまったく正しかったようで、現在、維作と条時は毎日幼稚園へ2人で通っています。





10月になると、我々の就職活動などのことを考えて、わが家でもインターネットを使えるようにしようとINSネットを引きました。そして、ターミナルアダプターを買いました。ちょうどそのころ初めて阿南にインターネットのアクセスポイントが現われました。さっそくそれに入会しました。そしてわが家のホームページを作ることを目標にインターネットのシステムをいろいろ学びました。

そうこうしているうちにだんだん物理学への関心が戻ってきました。理研で行ったがまだアクセプトされていなかった仕事をまとめることにし、いくつか再投稿しました。そして特にこれといったデューティーもないので、ずっと考えてきたがうまく行かなかった、「分数排他統計をもつ高次元気体」の問題を考え直すことにした。そして、実に幸運にも、あるアイデアに気付くことによって、それまでできなかったことができ、それをさっそく論文にまとめ、12月末にフィジカルレビューレターズ(Physical Review Letters, PRL)という世界最高の物理学の学術雑誌に思いきって送りました。幸いにもすんなりとアクセプトされ、これは[4月28日号のPRL78, 3233\(1997\)](#)に公表されました。そしてこれは徳島県阿南市がPRLに載った世界初の論文となりました。と同時に個人の自宅の住所がPRLに載った最初でもあるでしょう。

(1997年5月10日)

Bill との再会

1997年の2月24日に京都大学基礎物理学研究所（基研）で、阪大の川上則雄氏の主催の可積分系に関するインフォーマルセミナーが開かれ、そこにProf. Bill Sutherlandがアメリカから、Prof. B. S. Shastryがインドから講演に来ることになりました。わが家は一家でこれに参加し、たいへん楽しい一時を過ごすことができました。

実は、最初私はこの情報をユタ大学に留学中の私の友人の日高潤氏から知りました。そして、どういう日程かProf. Sutherlandにe-mailで聞きました。そして日程を教えてもらってから、川上則夫氏に私が参加してもよいか電話で聞いたのでした。彼からOKが出たので、わが家は一家で参加することにしました。というのも、私の妻、カコもBillとShastryの両方と面識があったからでした。

あれは私とカコがユタ、ソルトレイクを去る1990年10月、我々はBillの部屋に最後のお別れの挨拶に2人で行きました。そのとき、その部屋でちょうどBillと当時講演に来ていたShastryの2人が議論していたのでした。そこで、私とカコは2人と別れの挨拶と握手をしてから、日本へ帰ったのでした。ですから、わが家はどうしても、7年ぶりでは彼等と会い、わが家の息子維作と条時を見せたかったのです。

2月23日にカンポール京都へ午後着きました。この日はそこで過ごし、翌日の24日に京都大学基研に行きました。途中基研への行き方がわからなくなり、大学の入り口でピラを配っていた学生に道順を聞きましたが、彼は基研を知りませんでした。来る途中のタクシーの運転手も知らなかったもので、基研の権威も地に落ちたもんだと思い、そんな話をしつつ、我々は地図を見てやっと基研の建物たどり着きました。それは改築したばかりのきれいな新しい建物でした。しかし、隣の基研の古風な威厳のある建物と比べるとすっかり変わり果てた感じがしました。

Billが部屋にいなかったので我々はエレベーターの前で外の景色を眺めていました。するとエレベーターが開き、そこからBillとShastryの2人が現われました。すぐにBillはわが家に気付き、我々は7年振りの再会をしました。そこで我々はBillが美術のマスター（修士）であることを知っていたので、10年程前に日本で開かれた日仏合同の美術展覧会「ジャポニズム」の作品集ですでに事前に国立美術館から取り寄せていたものをBillとShastryにプレゼントしたのでした。この中には、有名なエッシャーの絵のような作品や江戸時代の優れた日本の芸術作品がたくさんありました。Shastryはそれほどでもありませんでしたが、Billは我々の予想通り非常に喜んでくれました。

まだ講演準備まで時間があるとBillがいうので、近くの知恩寺まで一緒に歩いて行きました。Shastryはちょっと用事があり忙しいというので、来れませんでした[後でカコに聞くと、彼はエレベーターの前まで走って来ましたが、ちょうどドアが閉まり乗り遅れて来れなかったのだそうです]。大学を出る時、Billが例のパンフレットを配っていた学生と気軽に話すではありませんか。それで、Billにその訳を聞くと、私が道を聞いたその同じ人に、彼は「黒猫のマークの車は何の車か？」とその日の朝聞いたのだそうです。それで私はその学生に彼は私のアメリカ留学時代の先生だと教えてあげたのです。それにはその彼もひどく驚いたようで、みんなで大声で笑いました。知恩寺では久しぶりにいろいろ話すことができました。わが家の子供たちもBillと打ち解け、何枚も写真を取ることができました。彼もわが家との再会をとて楽しみにしていたので、うれしそうでした。本当に楽しい一時で、一級の知性と触れると、何事やっても頭脳がリフレッシュされ、スッキリさせられるように感じました。

カコと維作と条時は講演の間、京都大学内を散歩していました。私は久しぶりに素晴らしいBillとShastryの話を聞くことができました。特にBillのCalogero-Sutherland Modelに関する講演は、創始者のものらしくたいへん良く考え抜かれた解りやすく、それでいて新しい知識も含めた良い講演でした。私はこの講演をビデオに取るつもりでしたが、知恩寺でBillにこのことを聞くと、ナーバスになるから取らないでくれということで、たいへん残念ながら録画しませんでした。結局Shastryの講演だけを録画しました。この講演には、数理解析研の数学者、三輪哲治氏も参加していました。

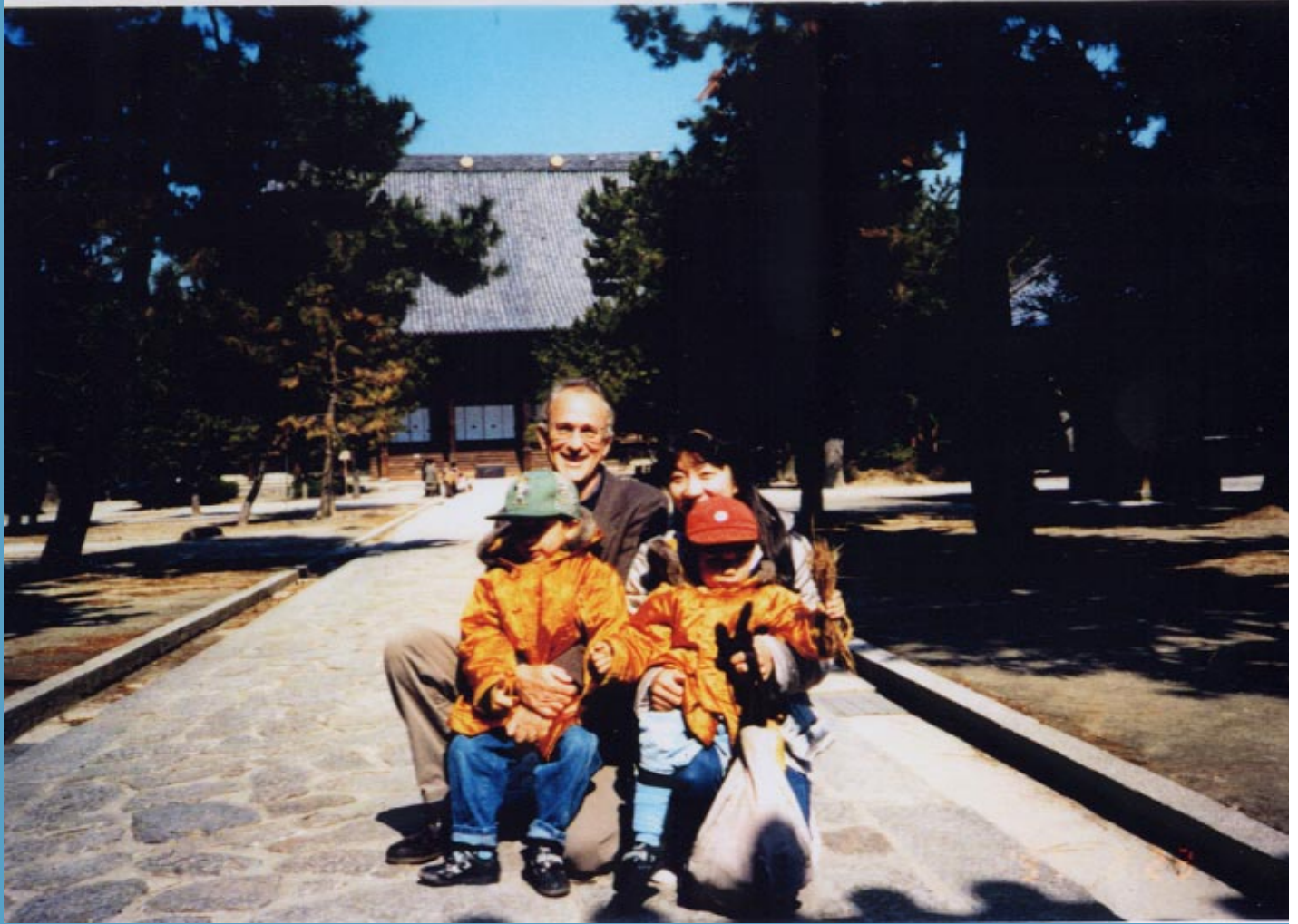
講演会の後、カコと条時と維作も戻ってきて、談話室でみんなでコーヒープレイクを取りました。そこで、カコはBillとユタ大学以来のまとまった話をしました。その後、ユタ大学で初めて会って彼と話した時と同様に、部屋に来ないかと誘われて彼の部屋でジャポニズムの本の話をしたのだそうです。その2人の姿を同室のShastryがうれしそうに眺めていたとのことです。その間私は基研の川上氏の同僚たちと自己紹介したり話したり、維作と条時の世話をしたりしていました。川上氏が6時にみんなで京都の有名な湯豆腐屋で夕食を取るので、どうするかと私に聞いてきたので、私は一家で参加すると言いました。そうこうしているうちに時間が来て、川上氏がわが家をその湯豆腐屋へ車で送ってくれました。

6時になると、その湯豆腐屋で食事が始まりました。維作と条時は子供用のメニューの食事をしました。私とカコは湯豆腐のコースを食べました。わが家は十分に食べることができましたが、基研の人たちはあまり十分に食べられなかったようです。彼等とわが家がBillとShastryの食事代を支払ったので、彼等にとっては踏んだり蹴ったりだったでしょう。この間私とBillとShastryはこの順に同じ側に座り、私の前にカコが座り、Billの前に三輪氏、Shastryの前に川上氏が座りました。食後、庭を縁側から見ました。時間はあっという間に経ちました。そして、たいへん名残惜しい感じがしましたが、我々はその湯豆腐屋の前で別れました。カンポール京都へは川上氏が彼の車で送ってくれました。たいへん彼に感謝しています。

次の日は午前中カンポール京都の近くの京都工業繊維大学へ行き、松浦氏と川村氏の研究室へ行きました。久しぶりに彼等に会って話げことができました。その後、銀閣寺を見、北の天満宮で白梅の木を見ました。そして電車で和歌山まで戻り、和歌山港からフェリーで小松島に戻り、汽車で阿南に戻りました。たいへんすばらしいBillとShastryとの再会でした。



先父 1996年 9月 4日 撮影



[もっと前](#) [もっと後](#)

[ホームページ](#) [和基](#) [和子](#) [維作](#) [奈蒔](#) [家族](#) [Donation](#)

「井口和基博士と家族のホームページ」
〒774-0003 徳島県阿南市畷町新はり70-3
井口和基 (C)2004